



TITLE:

# <大會抄録>北朝隋唐時代における 胡族の漢化:元氏を中心として

AUTHOR(S):

長部, 悦弘

---

CITATION:

長部, 悦弘. <大會抄録>北朝隋唐時代における胡族の漢化:元氏を中心として. 東洋史研究 1989, 48(3): 598-598

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154286>

RIGHT:

## 大會抄錄

北朝隋唐時代における胡族の漢化

——元氏を中心として——

長部悦弘

四三九年に北涼を滅ぼし、華北を統一した北魏の軍事力の擔い手であった鮮卑族（以下、胡族と呼ぶ）は、周知の如く五世紀末に孝文帝が漢化政策を敢行したのを境に、漢文化を本格的に受容し始め、唐代には元行沖・元稹など漢文化の精華を吸収し、更に自身の作品を漢文化の中に刻印する文人すら産み出すに至った。

胡族の漢文化受容は、北魏孝文帝時代から唐代にかけて一直線に進んだのではなく、洛陽遷都後、北方の六鎮に留まり漢化に取り残された胡族が北魏末年の動亂の中から崛起し樹立した東魏・北齊では文化上、孝文帝により使用が禁止された鮮卑語を復活させるなど、鮮卑化とも言うべき様相を呈し、唐代にみられる胡族の完全とも言える漢文化受容、つまり漢化に至るまで紆餘曲折を経たのだが、これまで胡族の漢化については研究が孝文帝時代に集中し、それ以降の漢化については論及がなされなかった。加えて、孝文帝の漢化政策に研究の主眼が置かれていたがために、現實に漢文化の受容が進行したと推定される、日常生活の次元に眼を向けて、漢文化受容の過程、その結果成立した文化教育上の構造が今のところ明らかとなっていない。そこで、今回は時代を北朝から隋唐時代に設定

して、この問題を考えることとする。尙、胡族と漢族の通婚關係の進展を先ず手がかりに、考察を進めたい。

唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符補考

大津透

報告者はすでに「唐律令國家の豫算について」（『史學雜誌』九五—一二）、「大谷探險隊アンペラ文書群の復原」（『東洋史苑』二八、榎本淳一氏と共同執筆）において、大谷文書中のアンペラ痕をもつ文書群と、中國側發掘のアスターナ230號墓出土の文書を接續・復原し、表記の内容の一連の文書であることを示し、文書の性格と内容について簡単な解説を附した。その後武漢大學の陳國燦氏よりアスターナ235號墓出土の二點の文書がこの文書と一連であることを示された。

本報告では、新たに復原される部分の釋文ならびにその内容を簡単に解説し、あわせてそこから知られるようになった唐律令國家財政の特色の一端について考察を加えたい。本文書全體を見渡すと、軍事關係の財政指示が多く、このことは國家財政全體の傾向にある程度反映している。一つは牧監に關するもので、從來知られていなかった牧監關係の料物の流れがわかり、財政的に秦州が重要な位置を占めている。もう一つ、軍物の西域の軍事前線への送納に關する規定も多く、邊軍での和糴の財源として、諸州の庸調が秦州や涼州へ送納されている。唐の大帝國の軍事行動がいかに支えられていた